はじめに

本講義はある程度現代文を勉強した人が東大をはじめとした最難関国立大合格レベルに達するための講座です。ですから、問題も講義内容も最高峰のものを用意しました。予習の段階で全くわからない問題があったとしても気にせずに講義で理解してください。すると、当初は難しいと思えた問題にも太刀打ちできるようになるでしょう。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**

② **構文**

③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ映像を見るだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして「記述解答」を書いてください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は復習タイムでノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**ポイントを踏まえ類題を解く。解答を書き直す。**

最難関国公立　現代文　目次

第一講　「逆説」の読解①……p.8
第二講　「否定」「条件法」「連言」「選言」の発展的読解……p.16
第三講　「逆説」の読解②……p.28
第四講　「差異」と「類似」の発展的読解……p.38
第五講　「論理的読解」総復習……p.44
巻末資料　読解法一覧……p.54

第一講　「逆説」の読解①

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私は、この評論集に「人間、この非人間的なもの」という、一見、矛盾にみちた表題をえらびました。ずいぶんと、私がへそまがりだと思われるでしょう。たしかに、私はへそまがりです。それが、こんな題をえらばせたのです。

人間は人間的である、という常識に対して、人間は非人間的ではないのか、という反問を向けたのは、正直に申して、私のへそまがり的[A]ショウドウによるものだということを、認めねばなりますまい。しかし、へそまがり的直観にも、それなりの意味はあるのです。

人間は人間的であるという主張は、なんのへんてつもないものです。あたりまえです。そう、あなたは思いますか。じゃあ、どうして、あたりまえなのですか。

人間的という言葉は、本来は人間に関するとか、人間に属するという意味ですから、人間に受身的に従属している言葉であるはずです。そして、その本来の意味では、人間が人間的でないのが不思議なくらいです。人間

が変化すれば、人間的という言葉の持つ意味も無限にふくらんでいくわけで、たとえば、これでも人間なのかという人間ばなれした人間が現われ、それでも彼が人間だということになれば、彼のやることも人間的だといわなければなりますまい。そこで、はじめて「人間は、どんな場合でも、人間的である」という主張は、なりたつのです。

　でも、あなたは、人間的という言葉を、日頃、そのように、非限定的に使っておられるでしょうか。

　人間的という言葉に、あなたはもっと[B]リンカクのはっきりした、限定的なイメージを与えているのではないでしょうか。そこから、問題がおこるのです。

　むかし、リンゴは赤いと[C]ソウバがきまっていました。だから、リンゴのほっぺたといえば、それは真っ赤なほっぺたを意味したのです。リンゴのほっぺたといわれて、あなたは、うらなりのひょうたんのような、あおぶくれたほっぺたを考えられますか。否、断じて否です。ところで、あなたが、今、くだもの店の前に立って、そこに積まれたリンゴを見たらどうでしょう。そこに、リンゴは、赤いほっぺたのような色をして並んでいるでしょうか。黄色いリンゴ、あおいリンゴなどが、はばをきかしているにちがいありません。つまり、リンゴがリンゴ色をしていないのです。それ

と同じようなことが、バラとバラ色についてもいえるでしょう。最近のバラは、バラ色のものが少なくなりました。リンゴ色も、バラ色も、出発点では、リンゴとバラに結びついていました。しかし、リンゴとバラの変化に、リンゴ色もバラ色も追いつけません。そして、それらは、バラからもリンゴからも、切り離されてしまったのです。

　同じように、人間的という言葉は、もはや人間とは切り離されてしまっており、人間とは無縁なものです。リンゴが、リンゴ色をしていると言えなくなったように、人間は人間的であるとは限らない。いいかえれば、現代の人間は、非人間的であるといえます。「人間、この非人間的なもの」という主張は、こうして、一見矛盾にみちているようで、決して矛盾していないことが、おわかりでしょう。

　私に、人間とは何かを問いかけさせたものは、テレンチウスの、ニヒル・フマニ・ア・メ・アリエヌム・プトーという言葉でした。アデルフォス（兄弟）という芝居の中で、彼は、奴隷にそういわせています。私は、ラテン語を習っていた頃、辞書を片手に読みながら、その言葉にめぐりあったのです。今では、ラテン語の方はほとんど頭から出て行きましたが、その言葉だけは、残っています。ニヒルはニヒリズムという語を生んだ「なにもない」という意味です。フマニはヒューマニズムという言葉を生んだ「人

間に関する」を意味する語です。ア・メは「私にとって」で、アリエヌムは「関心をひかぬ」とでも訳せましょうか。プトーは、「思う」ということです。つまり「人間的なことで、私の関心をひかぬものは、なにもないと思う」というのです。その芝居は、ローマ人のDタイハイした生活の一面をえがいた喜劇ですが、その言葉には善悪を越えて、人間のやることは何でも人間的であるとし、それに無限に関心をはらい続ける姿勢が感じとられました。人間のやることに、人間的でないものは、悪をふくめて、なにもない。だから人間を知りつくすこと以外に、ア自分を人間であることから解放するものはないことを、私は教えられたのでした。その時まで、私の頭の中には、どちらかといえば、人間を善悪の此岸(しがん)に立たせようとしたところから出発した、センチメンタルなヒューマニズムしかありませんでした。私の人間は、そこで、善悪のひもで、がんじがらめにされて立っていたのです。私はテレンチウスに、一撃をくらわされて、目玉がとびだした感じでした。人間は、人間的という言葉に呪縛(じゅばく)されてはならない。人間の悪を非人間的と呼んで、人間から切り離し、自分を人間的と呼んで、それとは無縁なものと見なしてはならない。私は、そう思った。人間は、人間的という言葉の外縁を、無限に拡(ひろ)げつつあるのです。人間は、人間的という言葉の主人である。人間は、そのものが未完です。私が関心を持っ

ている人間は完結していない。それですから、人間的という言葉の意味の境界も、閉じられていません。しかも、人間が完結した時、つまり滅亡した時、それを認識する人間も残っていないわけですから、ィ人間とは何か、人間的とは何か、という問に、限定的な答をあたえることは不能です。私たちに可能なことは、限りなく問い続けることですし、それに答えることは、新しい問を準備するためでしかありません。

　人間的とよばれるものは、私たちを呪縛するためにあるのではなく、私たちが、人間の認識を高めるためにだけあるのです。私は、そのことに気付きながら、人間が、それまで、事物に対応するEフチョウにすぎぬ言葉に、思想を従属させていたことを感じたのでした。事物に対応するフチョウである言葉の奥にある、事物そのものを見ようとすることが、どれだけ困難であることか。私たちは、とかく、言葉で事物について語ってしまい、事物に語らせることができないでいるのです。人間的に、人間を語ることはしても、人間に人間的なものを語らせることが、できないのです。ベルグソンは、

「私の著書では、悪という言葉を用いなかった」

　といいましたが、彼が簡単にいってのけたことをまねるのが、どれだけ困難なことか。私は、今でもつくづくと感じています。しかし、それこそ

が、人間とは何かを問いかける姿勢なのです。

　人間、この非人間的なもの、と私がいうのは、人間をして語らしめれば、私たちが人間的と呼んでいたものを越えて、非人間的と呼んでいたものを語りはじめるであろうことを予告したいからに、ほかなりません。

　私が、人間が非人間的だというのは、私たちの人間的という考えが、あまりにもせまく、制限されているものですから、人間のやることは、何でもその枠からとび出さざるをえないという意味です。しかし、問題は、非人間的というのは、単に人間的でないという、人間的なものを消極的に否定する以上の意味を持ちはじめてしまうことです。非人間的だ、とうっかりいえば、それは非難の言葉、攻撃の言葉と受けとめられざるをえない。それが、人間の姿をありのままに見つめることを困難にさせます。なにしろ、人間であることには、価値はなくとも、人間的であるということには、価値が含まれているのですから。

（なだいなだ『人間、この非人間的なもの』）

問い一　傍線Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅのカタカナで書かれた語句を漢字で書きなさい。

問い二　傍線ア「自分を人間であることから解放する」とはどういうことか。説明しなさい（三〇字以内）。

問い三　傍線イ「人間とは何か、人間的とは何か、という問に、限定的な答をあたえることは不能です。私たちに可能なことは、限りなく問い続けることですし、それに答えることは、新しい問を準備するためでしかありません。」とあるが、それはなぜか、答えなさい（三〇字以内）。

問い四　筆者は「人間、この非人間的なもの」という表現を通して何がいいたかったのか、全体をふまえて答えなさい（五〇字以内）。

（次ページより解答欄）

問い一

A

B

C

D

E

問い二

問い三

問い四

模範解答

第一講 「逆説」の読解①

問い一

A	B	C	D	E
衝撃	輪郭	相場	退廃	符丁（符牒）

問い二

人間は善だと限定せずに、人為は全て人間的だとするということ。

問い三

人間は未完であり、人間が完結しても滅びて認識できないから。

問い四

人間は善だと限定できず善悪を超えて常に発展していくもので、そこに積極的な価値を見出したいということ。